HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | ブロニスワフ・ピウスツキ年譜（K.Inoue, “B.Piłsudski’s Chronological Record.”） |
| Author(s) | 井上, 紘一 |
| Description | ポーランドのアイヌ研究者　ピウスツキの仕事 ： 白老における記念碑の序幕に寄せて. 2013年10月20日. 北海道大学学術交流会館. 札幌市 主催：北海道ポーランド文化協会, 北海道大学スラブ研究センター. 共催：グローバルCOE プログラム「境界研究の拠点形成」. 協力 ： 駐日ポーランド大使館, ポーランド広報文化センター |
| Relation | 「ポーランドのアイヌ研究者　ピウスツキの仕事 ： 白老における記念碑の序幕に寄せて」研究会報告集 |
| Issue Date | 2013-10-20 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/53478 |
| Type | conference paper |
| File Information | 63inoue_rev.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# ブロニスワフ・ピウスツキ年譜

井上 紘一

波蘭の志士ブロニラウ、ビルスドスキー氏なる人あり、郷里ウヰルナ市の中學校を卒へて聖彼得堡の法科大學に入り修學中、露國革命派と意氣相投じ、資を擲て其擧を助け、遂に露國警察の探知する所と爲りて捕はれたるは十九歳の時なりしが、樺太北部の寒村に流謫せられて、居ること十二年、土人ギリヤク及びアイヌと交わりて能く其言語風俗に精通し、ギリヤク考を草して露國地學協會記事に掲載されたり、後西伯利大陸に轉任するを許され、浦鹽斯德に移り地學協會博物舘管理の任に當り、傍ら新聞事業に從事中、露國大學院設置の亜細亜研究會より樺太南部在住「アイヌ」の實地調査を託され、樺太南部に渡りてアイヌの事情を調査研究すること三年有半、其間我が北海道アイヌの事情をも調査せんとして、同道に渡航したること二回、日露開戰の危機に迫りて去りたりしが、戰後より本邦に渡來し、東京に滯在すること五箇月、普く知名の人類学士に就きて研究を遂け、去月二十四日を以て歸國の途に就きたり……[1]。

**1866**

● 露暦 10 月 21 日(グレゴリウス暦 11 月 2 日)、ロシア帝国ヴィルノ県にある母の相続領地ズーウフ(現ザラヴァス)にて出生。ユゼフ・ピョトル・ピウスツキと、ビレーヴィチ家出身のマリア・ピウスツカの第三子で長男、ピウスツキ家の嫡嗣。両家ともリトワニアでは由緒正しい貴族の家柄である。

**1875**

● 7 月 4 日、「ズーウフ」の大火で屋敷がほぼ全焼。県都ヴィルノ(現リトワニア共和国首都のヴィルニュス)へ一家を挙げて引っ越した。

**1877**

● 9 月、年子の弟ユゼフ(のちの再興ポーランド共和国初代元帥)とともに、ヴィルノ第一ギムナジヤに入学。

**1882**

● 春、次々弟のアダムを含むピウスツキ 3 兄弟は同世代の若者らと語らって、自主教育サークル「スプイニャ」を組織した。最初の非合法活動に従事する。

**1883**

● 6 月 14 日、6 年次の学年末試験に失敗し、落第が宣告される。
● 7 月 10 日、ヴィルノ第二ギムナジヤへ転校。
● 11 月 4 日、母マリアの手術が執行されて、深く落ち込む。
● この頃、バニェヴィチ家の娘ゾフィアに恋をする。初恋であった。

**1884**

● 3 月 3 日、ゾフィア・バニェヴィチの許でピアノのレッスンを受ける。恋語らいの間、就

[1] 露國ビルスドスキー氏寄稿「樺太アイヌの狀態」(上) ——『世界』二十六號五十七頁所収、東京：京華日報社(明治三十九［1906］年六月十日発行) ——の「編者序」より。「ブロニラウ、ビルスドスキー」はブロニスワフ・ピウスツキを指しており、同記事は彼のアイヌ関係処女作である。原文はロシア語。訳者は上田將であることが判明している。「編者序」はあるいは訳者による「著者紹介」か。いずれにせよ、ピウスツキ本人の手になる略歴メモか、口頭で語られた経歴を、上田が邦訳した文章であろう。ピウスツキの正確な略歴が、1906 年には邦文で公表されていた。

寝中の母親を騙すべく、妹のマリアがピアノを弾き続けた。
● 春、末子(第 11、12 子)の双子弟妹が風邪をこじらせて死亡。
● 8 月 20 日、母マリア・ピウスツカが永眠する。享年 42 才。

**1885**

● 4 月末、ゾフィア・バニェヴィチは、母親の差し金でペテルブルグへ遣られ、鉄道関係事務所に就職。
● 8 月 3 日、追試を経て 7 年次を無事修了するも、ヴィルノ第二ギムナジヤは辞めることを決断。
● 8 月 19 日、ゾフィアを追って、帝都サンクト・ペテルブルグに到着。翌 20 日には彼女と再会するも、二人の仲は母親によって引き裂かれた。その後、傷心のブロニスワフを慰めたのが、母親とともに上京した年子の妹マリア・バニェヴィチであるが、その詳細は詳らかでない。
● 8 月 27 日、ペテルブルグ第五ギムナジヤの 8 年次編入学。

**1886**

● 6 月、同ギムナジヤ卒業。7 月 29 日、サンクト・ペテルブルグ帝国大学法学部入学手続きを済ませる。
● 12 月末、帰省し、クリスマス休暇をヴィルノで過ごす。ブロニスワフにとっては「最後の帰郷」だった。

**1887**

● 2 月 1 日、休暇を終えてペテルブルグに戻る。
● 3 月 3 日、ペテルブルグ市内で 3 月 1 日に起きたロシア皇帝アレクサンドル三世暗殺未遂事件の容疑者として拘束され、ペトロパヴロフスク要塞の独房に収容される。
● 4 月 15〜19 日、元老院に特設された法廷で審理が実施されて、ブロニスワフを含む全被告 15 名に死刑が宣告される。
● 4 月 23 日、皇帝の特赦により、ブロニスワフは懲役 15 年とサハリン流刑に減刑される。
● 5 月 8 日、レーニンの兄アレクサンドル・ウリヤノフら 5 名の死刑囚に対して、シュリッセルブルグ要塞で絞首刑が執行された。
● 5 月 27 日、父ユゼフが遠くから見守る中で、ブロニスワフを乗せた護送列車はペテルブルグを出発、これが父子の「永久の訣別」となる。護送列車は、モスクワを経由して 6 月 6 日、オデッサに到着した。
● 6 月 9 日、ロシア義勇艦隊社の「ニージニー・ノヴゴロド」号は、525 名の既決囚を載せてオデッサを出港。
● 8 月 3 日、同号はスエズ運河、コロンボ、シンガポール、長崎を経由して、この日に北サハリン西海岸のアレクサンドロフスク哨所に入港。
● 8 月 9〜12 日、ティモフスク管区ルィコフスコエ村(現キーロフスコエ)の監獄まで徒歩で護送される。
● 8 月〜12 月、懲役囚に科される通常作業に従事する。加えて、役人や入植囚の子弟の家庭教師も務めだし、近在のギリヤーク(現ニヴフ)たちとの交流が始まる。

**1889**

● ティモフスク管区警察署事務部での勤務開始。

**1891**

● 1 月、ルィコフスコエ村を訪ねたリェフ・シュテルンベルグとの出会い。友情は終生維持される。これを機にシュテルンベルグと協力して、ニヴフ研究を推進する。

**1893**

● 7 月、ルィコフスコエ測候所での勤務開始。

**1896**

● 5 月 14〜17 日、父ユゼフの嘆願書が功を奏し、5 月 14 日付皇帝戴冠特赦令が適用されて、刑期の「三分の一」が削減されることになる。父親は 92 年 4 月、94 年 11 月にも同様な嘆願書を提出したが徒労に終わっていた。
● 7 月〜8 月、測候所設営のためコルサコフスク管区へ派遣される。アイヌの人たちとの初邂逅。

**1897**

● 2 月 27 日、軽減された刑期の 10 年が満了し、強制労働から解放されて、ティモフスク管

区ルィコフスコエ村に農民として登録される。
- 5 月 23 日、ロシア帝室地理協会プリアムール支部のアムール地方研究会(OIAK)は、同研究会博物館にブロニスワフを採用すべく、その居住地をウラヂヴォストクへ移すよう求める請願書を提出。しかし事態が紛糾して、中々結着しなかった。
- 9 月～12 月、アレクサンドロフスク哨所にて、サハリン島医務局主任 L.V.ポドゥプスキー医師の下で文書係を務める。勤務は翌 98 年 4 月まで継続された。

**1898**

- 4 月 20 日、民族学関係処女作「樺太ギリヤークの困窮と欲求」擱筆、論文は『ロシア帝室地理協会プリアムール支部紀要』(4 巻 4 分冊、1898 年、ハバロフスク刊)に掲載された。
- 5 月～8 月、ルィコフスコエ村の測候所に勤務。夏には父ユゼフが再び嘆願書を提出して、息子のウラヂヴォストク移転への高配を求めた。
- 11 月 28 日、プリアムール総督はブロニスワフのウラヂヴォストク居住を許可する。
- 11 月～12 月、OIAK 運営委員会はニヴフ民族資料の収集をブロニスワフに託し、200――11 月半ばに 140、12 月末に 60――ルーブリを送金した。

**1899**

- 2 月、ウラヂヴォストクにおける 1 年間の在住許可証が発給された――但し、警察の監視下に置かれる。
- 3 月初旬(12 日頃)、ウラヂヴォストク到着、OIAK 博物館の物品管理人(年俸 600 ルーブル)として館内に住みこむ。
- 10 月 28 日、パリ万博への極東地方関連出展品が、ロシア義勇艦隊社の「ヘルソン」号で搬出された。これは P.P.セミョノフ・ロシア帝室地理協会副総裁が OIAK 博物館に託した事業。出展品の構築はブロニスワフが担当、自らの収集したサハリン・ニヴフ資料 158 点も含まれていた。1900 年のパリ万博では、国際審査員がこの極東コレクション展示を高く評価して、ブロニスワフに銀牌を授与した。

**1900**

- この年、ブロニスワフは OIAK 博物館主事を務める。
- 3 月 17 日、自らの年俸を半分に減額して、残額では館に必須の標本製作者を雇用するよう申し出る。

**1901**

- この年、ブロニスワフは OIAK 博物館の司書を務め、沿海州統計委員会とも雇用契約を結ぶ。書記の N.V.キリロフ医師に協力して、同委員会の活動に積極的にかかわる。
- 2 月 23 日、N.A.パリチェフスキーOIAK 副議長と連署で作家チェーホフへ、「サハリン島と極東の旅」に関する著作の寄贈を求める書簡を送る。作家からは当該著作が寄贈された。
- 3 月 15 日、OIAK 準会員に選出される。
- 5 月 17 日、OIAK 博物館退職が承認される。ブロニスワフは衰弱した健康を養生すべく、より乾燥したブラゴヴェシチェンスクへの転地を願い出て、博物館での有給勤務も辞退することを申し出ていた。その背景には、パリチェフスキー副議長との確執があった。
- 夏、ニヴフ少年のインディンがサハリンからウラヂヴォストクに到着。ブロニスワフは、サハリンの教え子で最も聡明だったインディンを、勉学継続のため州都に呼び寄せることに成功する。
- 8 月 27 日、OIAK 博物館は月俸 50 ルーブリでブロニスワフを臨時雇用する。
- 10 月 18 日、プリアムール総督からブラゴヴェシチェンスク居住が許可されたが、転地療養の着手は急がなかった。この頃からサハリン出張をめぐってロシア帝室科学アカデミーの打診があったからであろう。

**1902**

- 2 月 17 日、科学アカデミー副総裁がブロニスワフへ電報を送り、民族資料収集を目的とする南サハリン出張を要請した。
- 4 月 2 日、父ユゼフ・ピウスツキがペテルブルグで永眠する。享年 69 才。
- 5 月 5 日、沿海州知事はサハリン島知事へ、「ピウスツキの行動に瑕疵はなく、州行政府に勤務している」と報告。
- 5 月 31 日、プリアムール総督は、アカデミーの委嘱によるブロニスワフの南サハリン出張を許可する。

● 7 月 5 日、中東鉄道会社の汽船「ゼーヤ」号でウラヂヴォストク港を出発、サハリン島へ向かった。ブロニスワフに託された任務はアイヌとオロッコ(現ウイルタ)の民族資料収集。彼はこのとき旅行許可証、1,000 ルーブリの出張費、OIAK 運営委員会から委託された民族資料購入の前金 50 ルーブリ、そしてカメラと(恐らく)エディソン式蓄音器も携えていた。また肺結核を発病したインディン少年も、故郷の島で養生させるべく帯同していたであろう。
● 7 月 11 日、コルサコフ(旧大泊)に到着。13 日、シヤンツィ村(旧落合、現ドリンスク)を訪ねる。
● 7 月 16 日～8 月 6 日、西海岸のマウカ(旧眞岡、現ホルムスク)地区に滞在して、アイヌ資料の収集や人口調査に従事し、蓄音器でアイヌの歌も収録した。
● 8 月 6 日、セミョノフ=デンビー商会の漁船に便乗して函館へ向かう。マウカ・コルサコフ間連絡船の当期営業が終了したため、函館を経由してコルサコフへ戻ったもので、函館には 3 週間滞在した。その間は G.P.デンビーの屋敷に逗留して、子息や森高夫妻(メリ夫人の兄弟)の案内で市内や近郊を見物する。但し、これは日露両国にとって非合法の「初来日」だった。
● 8 月 30 日、函館よりコルサコフに帰着。
● 9 月 10 日か 12 日、コルサコフにて M.N.リャプゥノフ・サハリン島知事と懇談。13 日以降はオトサン(小田寒、現フィルソヴォ)、セラロコ(白浦、現ヴズモリエ)の両村を訪ね、熊祭りに参加した。
● 10 月 8 日、リャプゥノフ知事の裁定で、ティモフスク管区在留農民身分に算入される。
● 11 月 14～24 日、シヤンツィ、オトサンを歴訪し、それぞれの村でアイヌ子弟のための識字学校開設に尽力する。いずれも冬場に開校され、前者では 18 才のインディン、後者では 27 才のタロンヂ(千徳太郎治)が教師を務めた。
● 11 月 24 日、東海岸のルレ村(魯礼)を訪ねて聴取り調査に従事、「ハウキ(英雄詞曲)」を初めて採録する。12 月 10 日、シヤンツィ村に戻った。
● 12 月 14 日、アイ村(相浜)に移り、アイ・コタン酋長バフンケ(木村愛吉)のロシア式丸太小屋に居候して越冬した。バフンケ宅はブロニスワフの定宿となるであろう。

**1903**

● 年初、ペテルブルグのシュテルンベルグから電報を受け取る。ブロニスワフの希望通り、南サハリン調査の継続を認めるとの内容で、前年に創設された「中央・東アジア研究ロシア委員会」が以降の調査資金を提供することとなる。彼は同委員会の調査助成第 1 号として、1903 年度に 700 ルーブリ、1904 年度は 750 ルーブリを受領する。1905 年度分は 1,000 ルーブリと算定されたが、調査は 6 月に中断されているから、全額は受け取れなかったであろう。
● 2 月 1 日以降 4 月 29 日までの 3 ヶ月間、ルレ村に半月(2 月 15 日～3 月 1 日)滞在して昔話や「ハウキ」の翻訳に従事したほかは、アイ村に腰を据えてアイヌ語学習などに励んだ。「バフンケ酋長の愛姪チュフサンマ/シンキンチョウ」との恋物語は、この春に出来したものと推定される。
● 2 月 28 日、インディンは肺結核が重篤化して入院、授業は中断を余儀なくされる。彼は 4 月初めにコルサコフの病院で息を引き取った。
● 4 月 24 日、1902/03 年の冬にシヤンツィ、オトサンの両村で実施した識字学校の活動報告を擱筆。
● 4 月 30 日～5 月 16 日、小舟で東海岸伝いに南下し、オブサキ(負咲)、オチョフポカ(落帆、現レスノエ)、トゥナイチャ(富内、現オホーツコエ)、アイルポ(愛郎、現スボヴォドナヤ)を歴訪。トゥナイチャでは山邊安之助らから「ハウキ」や「オイナ(神謡)」を採録した。
● 6 月 6 日、北サハリン踏査のため、多来加湾へ向かう便船を確保すべくコルサコフへ赴き、そこで W.シェロシェフスキの手紙に接する。5 月 5 日(グレゴリウス暦で同 18 日)付の手紙は「交通丸が来函したら、あなたと一緒か、たとえあなた抜きでも直ちにピラトリ(平取)へ出発する」と追記していた。4 月半ば(グレゴリウス暦で 5 月初旬)に函館入りを果たしていたシェロシェフスキは、遂に痺れを切らして、この最後通牒に及んだわけである。ロシア地理協会が派遣した北海道アイヌ調査の顛末は、本書に付載したシェロシェフスキの旅行記「毛深い人たちの間で」を見られたい。ところでブロニスワフの方は、直ちに北サ

ハリン行きを中止、便船の契約を解除してナイブチ(内淵、現ウスチ・ドリンカ)へ走り、日本語の通訳(千徳太郎治)を雇い入れたものの、サハリン島知事が出国を許可せず 2 週間余り足止めを食らった。

- 6 月 24 日(20 日？[2])、エディソン式蓄音器一式を携えたブロニスワフは、千徳太郎治を伴ってコルサコフを出港し、海路函館へ向かった。
- 7 月 8～10 日頃(グレゴリウス暦[3])、ピウスツキ一行は函館港に着いたと推定される。かくて発足したロシア地理協会調査団(シェロシェフスキ団長、ピウスツキ団員、千徳通訳)は、直ちに調査計画を策定する。
- 7 月 30 日、函館には既に「数週間」滞在しており、千徳と協力してアイヌ語テキストの露訳を完成させ、弟妹との面会にサハリンへ赴いたシェロシェフスキの帰函を待機中と、シュテルンベルグへ報告している。シェロシェフスキは 7 月 31 日か 8 月 1 日に帰函を果たしたとみられる。
- 8 月 2 日頃、ピウスツキは函館で路頭に迷うアイヌの人たちと遭遇する。和人に騙されて、大阪から辛うじて函館までたどり着いた、白老のノムラ・シパンラム(野村芝蘭)ら一行であった。調査費から 5 円を捻出して、野村らの帰郷を支援した。これが機縁で、調査団はまず白老村を訪ねることになる。
- 8 月 4 日夜半、シェロシェフスキ、ピウスツキ、千徳の 3 名は「肥後丸」に乗船して室蘭港へ向かう。
- 8 月 5 日早朝、「肥後丸」が室蘭港に到着。調査団一行は、室蘭から鉄道で白老に至るも出迎えはなく、線路北側の和人村の小旅館に荷物を預けて、南側のアイヌ・コタンへ赴く。散策中の 3 名はシパンラムの姉妹イシュウチ、妻ネンタシク、兄らと遭遇し、シパンラムの広壮な「チセ」に案内される。シパンラムは、賓客に鮮魚を振る舞うべく出漁して不在だった。シパンラムの兄(名前不詳)はその後、彼らを海辺へ案内する。3 名は夕刻に旅館へ戻って就寝。
- 8 月 6 日朝、就寝中の彼らの部屋をシパンラムが訪ねてきて、アイヌ式挨拶「カラプテ」を交わし合う。その後、アイヌ・コタンでの宿泊をめぐる交渉が展開されて、シパンラムが、白老郡各村戸長役場の「各村戸長」から了解を取り付けることを条件に、自宅への受入れに同意するや否や、当の各村戸長――当時の各村戸長の名は佐伯茂治である――が登場して「許可」を与えた。同日夕刻、調査団の 3 名はシパンラム宅に転がり込んで、食客となる。
- 8 月 7 日朝、シパンラムは即席の五右衛門風呂をしつらえさせて、客人に朝風呂を提供する。旅の疲れと汚れを洗い落とした 3 名は、心機一転して、白老での調査研究に着手した。
- 8 月 12 日正午前、白老コタンの野村芝蘭宅にさしかかった「青森の人」飯島桂と友人の生田は、ピウスツキに呼び止められて、そのままチセの中へ連れ込まれる。シェロシェフスキもピウスツキも「上着をぬぎ、日本の単衣を纏ひ、ポンチ絵の如き姿にて研究し居たり」と飯島は記している。早くも午後 1 時には、調査団の 3 名と日本人 2 名が連れだって社台へ赴き、和風化の著しい田村弥吉宅で休息する。彼らは夕刻に野村宅へ戻り、風呂をつかい、アイヌ料理に舌鼓を打ったのちに、ピウスツキの蓄音機から流れる「樺太アイヌの謡歌」に耳を傾けた。この夜は、彼ら 5 名とシパンラム夫妻が大きなチセの中で雑魚寝する。
- 以降 8 月末前後まで、調査団一行は白老に逗留する。シェロシェフスキの「毛深い人たちの間で」は、白老とその周辺の風物やアイヌの生活をつぶさに記録するが、正確な日付を欠くため「年譜」への収録は不可である。詳細は同旅行記の記載に譲りたい。
- 8 月末前後の一日の正午、平取を目指す調査団一行は、白老駅頭でアイヌたちが見送る中、列車で白老を発って早来駅へ向かった。早来では乗馬数頭と道案内を雇い、小さな旅籠に 1 泊する。
- 翌日、日高地方の原生林を騎乗踏破し、鵡川で一泊する。平取までの行程は白老から鵡川までが 30 ㌔、鵡川から平取まではさらに 30 ㌔、併せて 60 ㌔である。鵡川では、ジョン・

[2] ピウスツキの復命書はコルサコフ出発を「6 月 20 日」と明記するも、在コルサコフ日本領事館が発行した蓄音機搬出許可書の日付は「7 月 7 日」(露暦「6 月 24 日」)であった。本「年譜」では後者を採用する。

[3] 露暦では 6 月 25～27 日頃。以降、北海道滞在中はグレゴリウス暦を採用する。

バチェラーの布教で長老派教会に帰依した「プロテスタントのアイヌら」が、バチェラー師の札幌からの指示で調査団を出迎える。

- 翌々日、調査団一行は日高山麓の山道を走破して沙流川の河岸に達し、同日午後には平取コタンに到着した。村で唯一の旅籠に止宿する。9 月初旬のことと推定される。シェロシェフスキの「毛深い人たちの間で」に見える平取の件は、白老に比して精彩を欠くが、1 週間余りの滞在と想定されるからやむを得まい。シェロシェフスキが記す波乱万丈は、とみに険悪化していく日露関係をもろに反映している。調査団は、函館のロシア領事を介して伝えられた、ロシア大使館の調査中止命令には抗えなかった。とはいえ、ピウスツキが平取で遂行した調査は、短期間とはいえ頗る実り多いものだった。のちに執筆する学術論文では、平取で聴取した情報にかなり言及しているからである。
- 9 月 10 日頃、調査団一行は騎乗で平取を後にして、最寄りの鉄道駅――やはり早来であったと想定される――に至り、一両日中には札幌に到着したであろう。
- 9 月 12 日前後、シェロシェフスキ、ピウスツキ、千徳の 3 名は札幌入りを果たしたと推定される。バチェラーの「珍客来る」(『ジョン・バチラー自敍傳』所収)によると、彼らは「二三日」札幌に滞在し、ピウスツキはバチェラー宅に「少時く」宿泊したという。一方、シェロシェフスキは「一昨日/?!/」――即ち 9 月 15 日――、「豊平館に投宿し、道廳に出頭」する(小樽新聞 9 月 17 日付記事「波蘭人の土人研究」)。札幌での彼らの動静は概して不詳であるが、唯一知られるのは、シェロシェフスキが「博物館」を訪ねたという事実のみ。恐らくは札幌農学校の博物館であろう。千徳が通訳としてこれに同行したのは確実ながら、ピウスツキの参加は不詳である。
- 9 月 15 日早朝(?)、調査団一行は、プラットホームでバチェラーに見送られて札幌駅を後にした(「珍客来る」)。室蘭到着後、ピウスツキ(と千徳?)は、そのまま連絡船に搭乗して、同日中に函館に至るが、シェロシェフスキの函館帰着は 9 月 17 日だった。別行動の経緯は不明である。
- 9 月 19 日、ロシア地理協会調査団が函館で解散し、ピウスツキと千徳は半月ほど日本に滞在したあと(?)、サハリンのコルサコフへ戻る。
- 9 月 24 日[4]、ピウスツキと千徳がコルサコフに帰着。
- 9 月 28 日、アレクサンドロフスクのリャプゥノフ知事から、この日付の私信が届く。知事は、コルサコフスク管区でのアイヌ実態調査と、異族人統治規定の改正をめぐるサハリン案の起草を担当するよう懇願していた。ピウスツキは、南サハリンでの民族資料収集に加えて、上記の 2 課題も請け負うことになる。
- 9 月 29 日、アイ・コタンの定宿に戻る。
- 9 月下旬、ブロニスワフとチュフサンマは、バフンケ酋長の「取計らひで[…]全部落民が集まつて盛大な結婚式を擧げた」(樺太日日新聞 1934 年 1 月 10 日付記事「愛し夫よ何處?」)[5]。
- 10 月 14 日～11 月 29 日、コルサコフに長期滞在して、ナイブチに開設する識字学校のために資金や現物(学用品・図書)の寄付を募る。フォン・ブンゲ知事代行からは、支援金 200 ルーブリの約束を取りつけた。11 月 29 日、ナイブチ村に到着。
- 12 月 2 日、ナイブチに開設された寄宿制学校では、千徳太郎治が教師を務める傍らで、ピウスツキも教鞭を執った。瞠目される教育法は、アイヌ語をキリル文字で表記する形での作文指導である。自然発生的に「アイヌ文語」が成立してゆく。千徳らは 1906 年に滞日中のピウスツキとの間で、まさにこの「文語」を駆使して手紙を交換しあった。
- 12 月 18～20 日、生徒たちを引率してアイ村へ赴き、バフンケと共催した「狐送り」の儀式を見学する。

**1904**

- 1 月 21 日、ロシア帝室地理協会は、学術研究への顕著な寄与に対して、ピウスツキに銀牌を授与する。特に評価されたのは、人類学民族学博物館のために収集した樺太アイヌ資料とその整理分析、地理協会が派遣した北海道アイヌ調査への参加協力、OIAK 博物館主事並びに OIAK 書記としての業績などである。
- 1 月 26 日(グレゴリウス暦 2 月 8 日)、日露戦争勃発。ナイブチの寄宿制学校では、開戦の

[4] グレゴリウス暦では 10 月 7 日。これ以降、露暦に復帰する。
[5] 但し、記事に「年」の記載はなく、「1904 年」は編者の推測である。

知らせに怯えた父兄が先を争ってわが子を引き取りだして、予定の 3 月末を待たずに閉校を迎えた。

- 2 月 12 日、チュフサンマが、ピウスツキの長男木村助造を出産[6]。
- 3 月 31 日～11 月 13 日、戦時下にもかかわらず、前年 6 月に急遽中止した北サハリン踏査を敢行する。アイ村を犬橇で出発したピウスツキは東海岸を北上して、4 月 5 日に最北端の村ナイェロ(内路、現ガステロ)、翌 6 日にはタライカ(多来加)地方のチフメネスク哨所(敷香、現ポロナイスク)に至る。
- 4 月 6 日～6 月 12 日、タライカ地方に逗留してアイヌ、ウイルタ調査に従事。その間、4 月 22 日～5 月 4 日、5 月 22 日～6 月 1 日にはナイェロ村に滞在した。
- 6 月 25 日～7 月 17 日(グレゴリウス暦 7 月 8 日～30 日)、弟のユゼフ・ピウスツキが訪日して東京に滞在する。ユゼフは、日露戦争で捕虜となったロシア軍将兵からポーランド人を選抜して戦闘部隊を組織し、満州戦線へ投入する案を以て外務省や参謀本部と掛け合うが、成就しなかった。
- 6 月 13 日～10 月 7 日、ブロニスワフの方は、チフメネスク哨所からポロナイ川を舟で遡上したのち、上陸してティミ川上流域へ至り、近在する河谷に立地するニヴフ集落(ウスコヴォ、ハジリヴォ、スラヴォ、コムルヴォ、チルヴォ、プロヴォ、ウルンクルヴォ)を舟で巡回して、ニヴフ調査に従事した(7 月 13 日～8 月 9 日)。前後にはティモフスク管区のロシア人村落オノル(6 月 24 日～7 月 8 日、9 月 2～25 日)や、刑期を勤めたルィコフスコエ村(8 月 10 日～9 月 1 日)にも逗留する。当初はオノル村で越冬する心積りだったが、予定を変更し、9 月 25 日には同村を去って帰途に就く。
- 8 月、1903/04 年の冬にナイブチで実施した識字学校の活動報告をルィコフスコエ村にて擱筆。
- 9 月 26～28 日、ポロナイ川を下り始めるや猛烈な台風と遭遇、アブラモフカ村に避難する。29 日、増水した川に漕ぎ出したところで舟が転覆して、九死に一生を得るような体験もした。
- 10 月 7 日、チフメネスク哨所を経てナイェロ村に到着。当初の予定では同村で熊祭りに参加し、またナイブチから千徳も呼び寄せて、ナイェロのアイヌやチフメネスクのウイルタの子弟のために識字学校を開設するはずだったが、戦時下の混乱でいずれも実現せず、4 名の少年に対して識字教育を実施できたのみ。同村には 11 月 1 日まで留まった。
- 11 月 13 日、家族の待つアイ村に帰着。
- 11 月 16 日、コルサコフに赴く。これ以降は 1905 年 2 月 10 日まで、活動拠点を同地に移したようである。そこで人心の動揺、飢餓、物価高騰を目の当たりにしたピウスツキは、予定していた西海岸調査を断念。離島して大陸に居を移すことを考え始めるのも、この頃のことであろう。
- 11 月末、オトサン、セラロコを訪ねて、熊祭りに参加する。
- 12 月頃～翌年 2 月頃、戦時下で識字学校の開設が叶わぬため、希望者を対象に「訪問授業」を実施する。訪問教師を務めたのは、千徳太郎治と、インディンの教え子である 18 才のトゥイチポである。前者はルレ、ナイブチ、アイ、オトサン、セラロコの 5 村、後者は自身のシヤンツィ村をそれぞれ担当した。

**1905**

- 1 月 27 日～2 月 9 日(?)、シヤンツィ、ナイブチ、アイ、オトサンを歴訪する。
- 2 月 10～23 日、最後のコルサコフ滞在。離島を控えての残務整理――収集した民族資料の発送と保全措置、採録したテキストの翻訳、統計データの収集、資料製作者らとの清算など――に奔走する。
- 2 月 23～26 日、ウラヂミロフカ(豊原、現ユジノ・サハリンスク)に滞在。旅に携行する食糧を辛うじて入手することができた。
- 3 月 1～5 日、アイ村にて身辺整理。5 日、妻のチュフサンマ、息子の助造との離別。
- 3 月 6 日、オトサン村にて友人のシャマンが「別れの儀式」を執行してくれた。

---

[6] 子息木村和保氏の御教示よると、昭和 38 年 9 月 14 日付で作製された戸籍では、父上の生年月日が「明治 36 年 2 月 12 日」と記載されているとのこと、生年は 1903 年である。しかし、編者はそれを 1 年遅らせることを余儀なくされた。

●3 月 10 日、ピウスツキは 7 日にマグンコタン(馬群潭、現プガチョヴォ)に至り、犬橇の到来を待機していたが、この日に北へ向けて出立。ナイェロを経由して(11 日)、チフメネスク哨所へと向かう。
●3 月 12～23 日、チフメネスク哨所に逗留。折しもインフルエンザが猖獗を極めて、ピウスツキも罹患したため、出立に大幅な遅延が生じた。
●3 月 28 日～4 月 13 日、オノル村に滞在。
●3 月、リャプゥノフ知事に依頼された「アイヌの習俗整備と統治に関する規程草稿(トムスク手稿)」をオノル村にて擱筆。
●4 月 13 日～5 月 12 日、ルィコフスコエ村に逗留。同村に滞在中、「サハリン島の個別アイヌ村落に関する若干の情報」、「アイヌの習俗整備と統治に関する規程草稿」――リャプゥノフ知事に提出された修正稿――を、この順序で擱筆した、とピウスツキは記している。
●4 月 28 日、1904/05 年の冬に実施した識字教育の活動報告をルィコフスコエ村にて擱筆。
●4 月 30 日、刑期が満了していたピウスツキは、1904 年 8 月 11 日付特赦令にもとづき、首都を除く帝国全域の希望する場所に居住することが可、というリャプゥノフ・サハリン島知事の裁定が通達された。念願のヴィルノ県(現リトワニア共和国)への帰郷が可能となる。
●5 月 12～30 日、デルビンスコエ村(現ティモフスク)に滞在。
●6 月 11 日、小型舟艇「ウラヂヴォストク」号でアレクサンドロフスク港を発ち、サハリン島から脱出。
●6 月 12 日、アムール河口のニコライェフスクに到着し、10 日ほど滞在する。ハバロフスクへ赴く途上でマリインスクに立ち寄り、アムール地方に在住するアイヌの人たちの消息を訊ねた。
●7 月初旬、ハバロフスクに到着。
●7 月 14 日、中央・東アジア研究ロシア委員会の W.ラドロフ議長宛に近況報告を擱筆。ハバロフスクで接したシュテルンベルグ同委員会書記の手紙に、約束されたロシア横断鉄道無料切符の送付は無理だろう、とあるのは「まことに遺憾」と記している。
●8 月初め、3 年ぶりにウラヂヴォストクに戻る。
●8 月 5 日、12 日、「ピウスツキ OIAK 準会員のサハリン調査の成果討論会」と銘打つ OIAK 主催の連続講演会が催される。プログラムは(I)異族人の許への旅、(II)サハリン異族人の歴史的過去、(III)異族人をめぐる学術協会の課題を謳っていたものの、18 日に予定されていた第 3 回討論会は、開会の 1 時間前に日露講和の知らせが届いて、お流れとなる。
●8 月 23 日(グレゴリウス暦 9 月 5 日)、日露間のポーツマス講和条約が締結される。
●9 月中旬(?)、日本占領下の南サハリンを訪ねて、アイ村で家族――チュフサンマ、助造――と会う。家族引取りの交渉は、バフンケ酋長の峻拒に遭って不首尾に終わった。家族との「永久の訣別」。
●10 月初旬、神戸を訪ねてニコライ・ラッセル(スヂロフスキー)の事務所を手伝う。
●11 月、OIAK の委嘱により、アムール流域のトロイツコエ村でナーナイ民族資料を収集する。
●11 月 5 日、ハバロフスクの全市民集会で演説、「市民ビューロー」設立を提案して 100 ルーブリを寄付。
●12 月 5 日(グレゴリウス暦 12 月 18 日)、友人の N.P.マトヴェイェフ(筆名ニコライ・アムールスキー)、彼の 11 歳の娘ゾーヤとともに、ウラヂヴォストクを出港して日本へ向かう。この日以降、ピウスツキがロシアの地を踏むことはなかった。
●12 月 7 日(グレゴリウス暦 12 月 20 日)前後、ピウスツキら一行の乗船は、恐らく敦賀港か門司港に入航して、脚部疾患治療のため入院するゾーヤを、ピウスツキも福岡医科大学病院まで送り届けたものと推定される。
●12 月 8 日、ピウスツキの長女木村(結婚後の姓は大谷)キヨ、アイ村で誕生。

**1906**

●1 月初め前後[7]、ピウスツキ上京。
●1 月 6 日頃、報知新聞記者の取材を受ける(報知新聞 1 月 7 日付記事「浦鹽よりの二珍客」)。

[7] 露暦では 12 月中旬に当たる。これ以降はグレゴリウス暦を採用し、必要の際は露暦も括弧内に併記する。

記事にはピウスツキが築地の「セントラルホテルに投宿」とある。同記事は 1 月 10 日付の北海タイムスと馬關毎日新聞にも、ほぼ同じタイトルで転載されている。なお、7 ヵ月半に及んだ日本滞在中の彼の動静は、澤田和彦作成の「ブロニスワフ・ピウスツキ日本暦」が詳述しているので、参照されたい。本「年譜」では重要事項を摘記するに留める。

- 1 月下旬～7 月初旬、京橋区尾張町の箱館屋裏二階に居を定める。ピウスツキが在京中に親しく付き合ったのは二葉亭四迷(長谷川辰之助)、横山源之助、上田將、宮崎民蔵・寅蔵(滔天)兄弟、福田秀子、橘糸重らである。坪井正五郎、鳥居龍蔵、關場不二彦(理堂)、小谷部全一郎、神保小虎、村尾元長などアイヌ研究者、また黄興、宋教仁など民報社系の中国人革命家、そして亡命ロシア人たちとも交流があった。新聞に掲載された関連記事は「露國人類学者」(東京朝日新聞、2 月 8 日付)、「日本婦人の研究」(報知新聞、3 月 9 日付)、「外人の日本婦人研究」(北海タイムス、3 月 20 日付)など。
- 3 月 16 日(露暦 3 月 3 日)、ロシア交通省官房からピウスツキ宛に送付された、サンクト・ペテルブルグまでの無料鉄道切符――一等車 2 席分――がウラヂヴォストクに到着する。しかし、余りにも遅すぎた。
- 6 月 18 日頃、本郷の中黒写真館で二葉亭と一緒に記念撮影を行う。
- 6 月、肉親がパリ経由の電信為替で、長崎の「ヴォーリャ」社気付として送金した 500～600 ルーブリ(帰国旅費)が到着する。しかし長崎では受け取れず、結局、発信地のクラクフで受領することとなる。
- 7 月、東京を後にして長崎へ赴く。長崎では稲佐の志賀親朋宅に居を定める。
- 7 月 10 日、アイヌ関係処女作の「樺太アイヌの狀態」(上)が、上田將の邦訳で京華日報社の月刊誌『世界』26 号で公刊される。これは、ピウスツキがルィコフスコエ村で擱筆した「サハリン島の個別アイヌ村落に関する若干の情報」前半部の日本語訳である。
- 7 月 30 日、米国の大北汽船会社の「ダコタ」号に搭乗して長崎を離れる。
- 8 月 1 日、「ダコタ」号は 7 月 31 日に神戸に寄港したあと、この日、横浜に入港する。
- 8 月 3 日、「ダコタ」号が横浜港を出航し、太平洋上を一路シアトルへ向かった。
- 8 月 10 日、ピウスツキの「樺太アイヌの狀態」(下)が『世界』27 号に掲載される。
- 8 月 16 日頃、「ダコタ」号がシアトルに入港。以降は大陸横断鉄道で米国を東進、シカゴを経由してニューヨークに着く。さらに大西洋を横断して欧州に至り、ロンドン、パリを経て、オーストリア統治下のポーランド(ガリツィア)に到着する。
- 10 月 21 日頃、ポーランドの古都クラクフに着き、弟ユゼフの滞在する保養地ザコパネへと向かう。19 年半ぶりの兄弟再会。
- 11 月 7 日頃、クラクフに戻り、翌年の 5 月末までこの町を拠点にする。
- 11 月 20 日(露暦 11 月 7 日)、サハリン島知事は、1905 年 10 月 21 日付の特赦令にもとづき、ピウスツキに対する警察の監視と、首都での居住権制限を解除し、また裁判で喪失した諸権利も復活させる、との裁定を通達する。遅まきながら、ピウスツキ家の領地や資産の相続権を回復、首都にも住めるようになる。
- 11 月 21 日、二葉亭四迷宛書簡に「すでにこちらで私に許嫁が用意されていて、たぶん結局は結婚することになるでしょう……。私は彼女と二十年も会っていませんけれど」と記したが、マリア・ジャルノフスカをめぐって確認できる最も早い言及である。彼女は旧姓バニェヴィチ、ブロニスワフの初恋の相手(ゾフィア・バニェヴィチ)の年子の妹で、彼にとっては単なる幼馴染に過ぎなかった。1886 年の秋、姉のゾフィアとの仲を引き裂かれて落ち込むブロニスワフに同情するうちに、二人は相愛の仲になった模様である。マリアは 1889 年に、かなり年上の資産家ヤン・ジャルノフスキと結婚したが、この当時は、一人息子のヤンを夫の許に残して別居中であった。
- クリスマス週間、ヴィルノに在住する末妹ルドヴィカや叔母のステファニア・リプマンが、相次いでブロニスワフを訪ねる。ルドヴィカは 1903 年の秋、サハリンを訪ねることを計画するも、日露関係の紛糾で断念していた。積もる話に花が咲いたであろう。
- 年末、ペテルブルグ在住の弟カジミェシュがジャルノフスカの住所を、兄の求めに応えて手紙で伝える。

**1907**

- 1 月 21 日頃、ペテルブルグのジャルノフスカ宛に「懐旧?」の文を記すも発送しなかったが、4 月 16 日には第 2 信を執筆する。いずれでも、彼女が 1903/04 年のクリスマス週間に、

サハリンのブロニスワフへ電報を送った事実に言及しており、それへの返信との心算が窺える。第 2 信では「夏にザコパネへ行きます。[そこで]会うのはどうでしょうか。いずれにせよ蒸し暑いピーテルを、数週間は後にされるでしょうから」と記している。

- 5 月 17 日、マリア・ジャルノフスカがクラクフに到来する。20 年ぶりの再会であった。
- 6 月初め～7 月後半、ジャルノフスカとともにチェコの保養地カルルスバードで静養する。
- 8 月、カルルスバードからクラクフへ戻り、ほどなくガリツィアの保養地ザコパネへ居を移す。その後 8 ヵ月間、同地が拠点となる。ブロニスワフとマリアは当初、学生用ホステルに投宿するが、11 月以降はクルプフキの食餌療法ペンション「ヴィラ・ヒュゲア」で愛の巣を営む。
- 夏、ピウスツキ家の 4 兄弟がタトラ山中――ユゼフの山荘であろう――で家族会議を催す。出席したのは、ヴィルノから訪れていたヤンとその妻マリア、ユゼフとその妻マリア、ペテルブルグからのカジミェシュ、そしてブロニスワフとその同棲者マリア。奇しくも女性たちはすべて母親と同名だった。
- 9 月 9 日、二葉亭四迷宛書簡に「あなたにまずお伝えしたいニュースは、私の結婚です。妻の写真を送ります。妻は私の幼馴染です」と記す。
- 10 月 22 日、マリア・ジャルノフスカは 5 ヵ月の同棲生活を切り上げて、ザコパネを後にする。彼女はクラクフ、ワルシャワ、ヴィルノを経てペテルブルグに戻った。ブロニスワフは、その直後から 12 月にかけて、心情を吐露する情熱的な手紙 30 余通をマリア宛に執筆する。そのうちの 17 通はヤン・スタシェルが 2003 年に公刊しているが、11 月 23～24 日付の手紙では、フィンランドを希望するマリアの意向にもかわらず、ルヴフで共同生活を開始する提案を伝えていた。
- この年、「樺太アイヌの経済生活をめぐる概況」と「サハリン島の個別アイヌ村落に関する若干の情報」がウラヂヴォストクで公刊される(ともに『アムール地方研究会紀要』10 号所収)。後者は、1906 年の夏に東京で上梓された「樺太アイヌの状態」のロシア語原典に当たる。

**1908**

- 1 月後半、マリア・ジャルノフスカがザコパネに再来。彼らは「ヴィラ・ヒュゲア」に逗留する。
- 3 月頃、ブロニスワフとマリアは、ガリツィアの都市ルヴフ(現リヴィウ)へと居を移す。1 年余りに及んだルヴフ期のブロニスワフは、マリアという伴侶を得て充実した至福の時を過ごしたであろう。それは、以降の数年間にポーランド、ロシア、ドイツ、フランスの学術雑誌に発表された夥しい数の論文からも覗える。マリアは声楽のレッスンに通って、生計を支えるべくプロの歌手を目指した。しかし、彼女は発病して、乳癌と診断される。

**1909**

- 春、マリア・ジャルノフスカは乳癌手術を受けるべく、ペテルブルグの「法律上の夫(ヤン・ジャルノフスキ)」の許に戻る。
- 5 月、マリアの手術が執刀された結果、乳癌はかなり重症で、転移もあることが判明する。しかるに、小康を得たマリアは再びブロニスワフの許へ走ることになる。
- 8 月～1911 年 1 月、西欧諸国を 18 ヵ月間遍歴する。ブロニスワフはルヴフの有力紙「クリエル・ルヴォフスキ」の通信員も兼ねており、また売却用にアイヌの工芸品や、フォークロア・テキストを収録した蠟管も携えていた。
- 11 月～翌年 5 月、パリに滞在する。大学区の周辺で転々と居を移しながら図書館通いを続け、ソルボンヌ大学の聴講生でもあったようである。マリー・キュリーなど、フランス在住のポーランド知識人たちとも交際する。

**1910**

- 2 月、とんぼ返りでクラクフへ赴き、マリア・ジャルノフスカをパリに連れてくる。キュリー夫人が発見したラジウム線を用いての放射線療法も試みられた。
- 4 月、病状が悪化して再手術が必至となるや、マリアは自らの意思でパリを離れた。パリに到来した「法律上の夫」が、彼女をペテルブルグに連れ戻したという情報もある。
- 6 月初め～翌年 1 月、ロンドンに滞在する。日英博覧会で「アイヌ村」を実演する沙流アイヌ――のちに男女各 4 名と子供たちと判明する――と会って、聴取り調査を試みることが目的だった。博覧会の通行証を入手するまでに 7 週間を要したものの初志貫徹して、50

以上の物語を採録する。若干のアイヌ工芸品や蠟管の売却にも成功したらしい。
- この年、「アイヌ」と題する辞典項目が、F.A.ブロックハウス、I.A.イェフロン共編『新百科辞典』に収録される(第1巻所収、サンクト・ペテルブルグ刊)。

**1911**

- 1月末、パリを経由してクラクフに戻る。
- 5月12日、マリア・ジャルノフスカがサンクト・ペテルブルグにて永眠。
- 夏～翌年4月、ポトハレ地方の大地主ザモイスキ伯爵に招かれて、クゥジニツェの屋敷に逗留する。同伯爵と語らって、郷土誌研究会の設置計画をぶち上げることで、元気を取り戻した。
- 11月25日、ブロニスワフの発議で、同研究会はタトラ協会の民族学部門として発足する。彼はその議長に就任し、地元ポトハレ地方の郷土誌研究を組織する。剰え、収集品を収蔵・展示する施設として、タトラ博物館新館の建設までも構想する。

**1912**

- 5月～12月、ブィストレにあるコルニウォヴィチ医師の持ち家に居を定める。それはクゥジニツェとザコパネの中間にあった。30年後には、まさにこの家の屋根裏部屋で、ピウスツキの残した蠟管が発見されることになる。
- 10月、博物館事情視察のためプラハへ向けて旅立ち、(恐らく)スロヴァキアのマルティン、そしてチェコのヴィノフラディを訪ねた。
- 12月、ブロニスワフはクラクフとザコパネを駆け抜けて、スイスのヌシャテルへと向かう。その前に、民族学部門の議長職辞任を唐突に申し出るも、受け入れられず、彼は国外から送付する手紙によって、その職責を全うし続けることになる。
- この年、主著『アイヌの言語・フォークロア研究資料』(英語)が、クラクフのポーランド学芸アカデミーから上梓される。

**1913**

- 1月3日～5月、ヌシャテル大学の聴講生。
- 5月初め～7月10日、パリに滞在。
- 6月25日、タトラ協会宛に書簡を執筆するが、そこには「ギネット=ピウスツキ(Ginet-Piłsudski)」という署名が初めて見出される。ギネット家はリトワニア大公家に連なる由緒ある家柄で、ピウスツキ家の本家筋に当たる。ブロニスワフはこの頃、己をリトワニアとポーランドの狭間に立つ者、ないしは両者を統合する者と見做す境地に達したものと忖度される。遂にはGinet-Piłsudzkiと綴るに至る。
- 7月10日～10月、ベルギーのブリュッセルに滞在、ソルヴェー研究所で仕事をする。
- 8月3日、ザコパネではタトラ博物館新館の起工式典が挙行されるも、ブリュッセルに滞在中のブロニスワフは欠席した。
- 10月、ザコパネ郊外のブィストレに戻り、民族学部門議長として、郷土誌研究の組織化と推進に本腰を入れる。守備範囲は地元のポトハレからオラヴァ、スピシュ地方へと広がっていく。加えて、彼はタトラ協会の幹部でもあり、また創刊が決定された『ポトハレ年報』の編集主幹も務める。

**1914**

- 3月、クラクフのポーランド学芸アカデミーが民族学委員会を新設し、ブロニスワフはその書記に任命される。これは年俸600クローネの、同委員会では唯一の有給職員だった。とはいえ、欧州での7年間で彼が手にした初めての定職であり、定収入だった。彼はザコパネもしばしば訪れて、『ポトハレ年報』創刊号の編集作業を完了させている。ゲラ刷りまでは目を通したものの、印刷された本冊を目にすることはなかった。『年報』創刊号は1921年にようやく刊行されて、巻頭にはシェロシェフスキの手になるブロニスワフの追悼文が掲げられている。
- 6月末頃、ブリュッセルに滞在する。石川三四郎が「十年前に日本にて懇親を結んだ」「ピルスヅスキイ」と同地で遭遇したと伝えるからである。石川とは1906年2月25日、神田小川町の「牛屋」で催された、新紀元社の晩餐会に招かれたときに会っている。
- 8月5日、オーストリアがロシアに宣戦布告、第一次世界大戦が勃発する。
- 12月初め、ロシア軍のザコパネ進駐が現実味を帯びてきたため、ウィーンへ逃れる。この地には翌年の4月まで4ヵ月余り滞在する。

ブロニスワフはロシア国籍者であるが、米国横断中にロシア旅券を紛失しており、再発給の手続きを進めるも捗々しい結果は得られなかった。加えて、ロシアに入国するとシベリア送りにされかねない、という牢乎たる信念を堅持していたとも伝えられる。したがって、ポーランド内を走る墺露国境を越えることを強く逡巡して、故郷のヴィルノはおろか、ワルシャワですら訪ねることがなかった。

開戦後の欧州では、概してポーランド人 3 会派――ロシア統治下のワルシャワを拠点とする民族主義志向の親露派、ローザンヌに結集して保守主義を標榜するポーランド人亡命者らの親西欧派、そしてユゼフ・ピウスツキをリーダーとするポーランド社会党系の親墺派――が、それぞれの思惑で国家や社会の再建を果たすべく鎬を削っていた。戦時下のブロニスワフ・ピウスツキは、弟のユゼフと政治信条を共にするとはいえ、まったく不得手な政治に手を染めて、独自の政治的役割を果たすことになる。それはいわば敵対する二者を仲介し、和解を模索し、統合を志向するという役回りであるが、彼が生涯を通して追求した役割でもあった。

その嚆矢が、亡国ポーランドの実情を世に知らしむべく編集・公刊された『ポーランド百科事典』にまつわる一件である。当時は同趣旨の百科事典編纂がウィーンのみならず、ワルシャワやローザンヌでも別途に進行していたが、いずれも在米ポーランド人から寄せられる募金を当てにしていたため、3 件の統合が焦眉の急となる。その纏め役としてブロニスワフに白羽の矢が立てられた。

**1915**

- 3 月 31 日、ウィーンにてオーストリアの旅券が発給される。
- 4 月、バンドゥルスキ派――バンドゥルスキ・ウィーン司教の率いる親墺派――の百科編纂グループの正式代表としてローザンヌへ派遣される。激烈な論戦が交わされる中で、ブロニスワフは公正な仲介役に徹して、数ヵ月後には統合を成し遂げる。『ポーランド百科事典』(フランス語)は 1919～1920 年にスイスのフリブールとローザンヌで上梓された。
- この年、ロシア帝室地理協会の『ジヴァヤ・スタリナ』誌に「樺太島アイヌの熊祭りにて」が掲載される(同誌 23 年度 I–II 分冊、サンクト・ペテルブルグ刊)。

**1916**

- この年の初頭、ローザンヌに設置された「ポーランド・リトワニア委員会」の議長に就任する。ポーランド国家再興に際するリトワニアの処遇が主要な議題だった。ブロニスワフは、自分と志を共にする旧リトワニア大公国復興主義者と、リトワニアの分離独立を主張する民族主義者との和解を求めて奔走するも、折合いをつけられず、結局、リトワニア人民族主義者らは委員会を後にした。彼はその後もポーランド・リトワニア合同にこだわり続けて、死の直前まで、三国分割以前の両国の緊密な関係を証する歴史文献集の編纂に携わっている。
- その後の数ヵ月、中立国スイスで戦火を逃れて、自らの担当する『百科事典』項目の執筆に邁進する。かなり長期に及ぶラペルスヴィルのほかに、ローザンヌ、ヴェヴェイ、チューリヒ、ジュネーヴ、フリブールにも滞在したことが知られている。フリブールには『ポーランド百科事典』編集局があった。

**1917**

- 2 月、ローザンヌとジュネーヴで「シベリアにおけるポーランド人」と題する一連の講演を行う。この講演は翌年、フランスのルピュイで印刷されて、販売益は全額が慈善事業に寄付された。
- 6 月、チューリヒのポーランド協会の協力を取りつけて、戦場となったガリツィアの子供たちをスイスへ避難疎開させる救援事業を立ち上げる。ブロニスワフはプラテル・ツィベルク伯爵――欧州の貴族では最高ランクに属する高名な慈善事業家――と連名で、在米の著名な音楽家パデレフスキへ電報を送って、米国での基金構築を要請する。ところがパデレフスキは、全米から寄せられた募金 5 万スイス・フランを、ポーランド協会に断りなく、ピウスツキ、ツィベルクと連名の銀行口座に振り込んでしまう。この醜聞は「チューリヒ事件」と喧伝されて、協会幹部連はブロニスワフを強く非難し、剰え彼の高潔さや愛国心を疑い、学術業績までも嘲笑の的にした。「チューリヒ事件」は彼の心を深く傷つけることになる。
- 8 月 15 日、「ポーランド国民委員会」がローザンヌに創設される。連合国側は直ちに同委

員会を、ポーランド人の政治的願望に応える唯一の代表機関として承認する。議長に就任にしたのは親露派の保守政治家ロマン・ドモフスキ――ユゼフ・ピウスツキの政敵――である。当時のユゼフは、ドイツ軍に身柄拘束され、マグデブルグの監獄に収監されており、政治生命の危機に瀕していた。国民委員会はこれを奇貨とみて、パリに設立した委員会代表部における常勤ポストをブロニスワフに提案する。後者はその提案を受け入れた。

- 11 月半ば頃、ブロニスワフはパリに至り、同代表部の有給職員となって、公館内の一隅に居を構えた。彼が国民委員会から託された仕事は広報関係で、とりわけ編集者として多忙であった。また誰とでも話ができる才能が買われて、委員会外の重要人物との応対もしばしば任された。

**1918**

- 春、ポーランド人将兵捕虜の多くが抑留されているルピュイを短期訪問する。この地ではポーランド語隔週刊誌『イェニェツ・ポラク(虜囚のポーランド人)』が発行されており、同誌別冊として、彼の『シベリアにおけるポーランド人』の印刷が進められていた。ルピュイから戻ると、ブロニスワフはこれらの読者を対象とする新聞の発刊を具申する。
- 4 月 27 日、パデレフスキ宛に長い手紙を書き、「チューリヒ事件」に対する自らの関与を改めて説明している。
- 5 月 3 日、敵対する諸会派の和解を訴える覚書を擱筆し、多くの知友の間に自ら届けて回った。これは、いわば彼の遺書であったろう。ブロニスワフの病状は目に見えて悪化し、寝室の空気が蒸し暑くて重過ぎると訴えだす。友人らが田舎での静養を勧めると、同意したかのようにも見えた。さらには、委員会における自らの政治的役割に対する疑念や、誰かが己に毒を盛るか、謀殺するのではないか、という恐怖を周囲に洩らすこともあった。
- 5 月 16 日、友人らが手配してあった診察時間に医師を訪ねたブロニスワフは、放心状態で帰ってくる。
- 5 月 17 日、早朝に起床して友人を訪ねるも不在だったため、「この世とおさらばすべく、注射してもらいにやって来た。私にかけられた二つの嫌疑は、そのいずれでも私は潔白だ……」との書置きを残した。芸術橋(ポン・デザール)の守衛は 11 時 45 分、橋の上で上着を脱ぎ、セーヌ川へ抛るや、己の身もそこへ投じた男を目撃する。ブロニスワフはこのとき満 51 才 5 ヶ月半であった。
- 5 月 21 日、午前 8 時 15 分、ブロニスワフの遺体がミラボー橋(ポン・ミラボー)の袂で発見される。
- 5 月 29 日、ノートルダム寺院で計画されていたブロニスワフ・ピウスツキの葬儀は、急遽中止されて、遺骸はパリ郊外モンモランシーのポーランド人墓地へと運ばれる。埋葬儀式を執行したのは、地元の教区司祭だった。

## 参考文献

(邦文文献)

飯島生「北海道紀行」『博物學雑誌』40(1903):15–17、飯島桂「北海道紀行其二」同誌 42(1907):35–38

井上紘一「ブロニスワフ・ピウスツキの不本意な旅路」加藤九祚・小谷凱宣編『ピウスツキ資料と北方諸文化の研究』(国立民族学博物館研究報告別冊 5 号)45–65(1987)

井上紘一「B.ピウスツキと北海道:1903 年のアイヌ調査を追跡する」井上紘一編『ピウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』11–31、札幌:北海道大学スラブ研究センター(2003)

井上紘一「日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事(1903–1939)」(上・下)『関西外国語大学研究論集』91:267–280、92:185–201(2010)

井上紘一「日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事(1903–1939)増補改訂版」[電子稿[8]]

コヴァルスキ、ヴィトルド、井上紘一訳「ブロニスワフ・ピウスツキの遍歴:日本出国から自殺まで」『ポロニカ』4(1993):38–53 [Kowalski 1992(ロシア語版)からの邦訳]

澤田和彦「ブロニスワフ・ピウスツキ日本暦」澤田和彦『幕末・明治・大正期の日本とロシ

[8] 「電子稿」と付記された本稿、ならびにピウスツキ作品の拙訳稿は未刊行ながら、PDF 版での提供は可能である。入手を希望される方は、inouek.sap@gmail.com 宛に御一報ください。

アの文化交流に関する実証的研究』25-64、さいたま：埼玉大学教養学部(2007)
沢田和彦編『ポーランドの民族学者ブロニスワフ・ピウスツキの生涯と業績の再検討』(埼玉大学教養学部リベラルアーツ叢書 5)、さいたま：埼玉大学教養学部・文化科学研究科(2013)
シェロシェフスキ、井上紘一訳「毛深い人たちの間で」[本書に収録]
ピウスツキ(露國ビルスドスキー氏寄稿)「樺太アイヌの狀態」(上・下)『世界』26：57-66、27：42-49、東京：京華日報社(1906)
ピウスツキ、[二葉亭四迷宛書簡 15 通(安井亮平翻刻・邦訳)]『二葉亭四迷全集』別巻、114-164、筑摩書房(1993)
ピウスツキ、井上紘一訳「樺太ギリヤークの困窮と欲求」(原典 1898 年刊)[電子稿]
ピウスツキ、井上紘一訳「樺太アイヌの経済生活をめぐる概況」(原典 1907 年刊)[電子稿]
ピウスツキ、井上紘一訳「サハリン島の個別アイヌ村落に関する若干の情報」(原典 1907 年刊)[電子稿]
ピウスツキ、井上紘一訳「樺太島の原住民における分娩・妊娠・流産・双子・畸形・不妊・多産」(原典 1910 年刊)[電子稿]
ピウスツキ、井上紘一訳「アイヌ」(原典 1910 年刊)[電子稿]
ピウスツキ、井上紘一訳「樺太島アイヌの熊祭りにて」(原典 1915 年刊)[電子稿]
ピウスツキ、井上紘一訳「アイヌの習俗整備と統治に関する規程草稿」(原典 2000 年刊)[電子稿]

(欧文文献)

"Bronisław Piłsudski Chronicle. Part 1: 1866−1905," K. Sawada and K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 1, pp. 445−490, Saitama (2010)
"Bronisław Piłsudski Chronicle. Part 2: 1905−1984," K. Sawada and K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 2, pp. 379−423, Saitama (2010)
Inoue, K. (ed.), *B. Piłsudski in the Russian Far East: From the State Historical Archive of Vladivostok* (*Pilsudskiana de Sapporo* no. 2), Sapporo: Slavic Research Center of Hokkaido University (2002)
Inoue, K., "Bronisław Piłsudski's Endeavours on Ainu Education and Self-government," K. Sawada and K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 1, pp. 337−366, Saitama (2010)
Inoue, K., "The Ainu Expedition to Hokkaido in 1903," K. Sawada and K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 2, pp. 3−37, Saitama (2010)
Kowalski, W., "The European Calendarium: Bronisław Ginet-Piłsudski in Europe 1906−1918," K. Sawada and K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 2, pp. 129−150, Saitama (2010)
Латышев, В.М., *Сахалинская жизнь Бронислава Пилсудского: Пролегомена к биографии*. Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство (2008)

＊ Author & title: K.Inoue, "B.Piłsudski's Chronological Record"